

第6講座 古文

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

むかし、を^①とこ、い^②とうるはしき友ありけり。片時^③さらずあひ思ひけるを、人の国へ行きけるを、いとあはれと思ひて、別^Aれにけり。月日経^④ておこせたる文に、あさましく対面せで月日の経にけること。忘れやし給^{なま}にけん、いたく思ひわびてなむ侍。世中の人の心は、目^{はな}かるれば忘れぬべき物にこそあめれといへり^Cければ、よみて^Dやる。

目かるとも思ほえなくに忘らるる時しなければ面影^{おもかげ}にたつ

（『伊勢物語』より四十六段）

（現代語訳）

昔、ある男に、とても仲むつまじい友人がいた。しばらくの間も離れることなく思いを交わし合っていたが、地方へ行ったのを、とても悲しく思つて、別れたのだった。月日が経つてから送ってきた手紙に、驚くほどお会いしないで月日が経ってしまったことです。お忘れになったのではないかと、とても悲しい思いをしております。世の中の人の心は、離れていて会わないでいると必ずと言っていいほど忘れてしまうものようですと言ったので、歌をよんで送る。

会わないで離れているとも思われないことですよ。忘れる時なんてないので、いつでもあなたの顔が幻として私の目の前にあります。

問一 〰〰線A～Dのうち、他と動作主の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二 〰〰線①「を」とこ、②「うるはしき」、③「あひ思ひける」の読

み方を、現代かなづかいのひらがなで書きなさい。

① 〰〰 ② 〰〰 ③ 〰〰

問三 〰〰線④「おこせたる文」の内容が書かれているのは、どこからどこまでですか。古文中から初めと終わりの四字を書き抜きなさい。

--	--	--	--	--	--

問四 〰〰線⑤「忘れやし給にけん」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 何をお忘れになったのではないかと知っているのですか。

(2) なぜお忘れになったのではないかと思うのですか。

問五 「目かるとも……」の歌に込められた気持ちとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 忘れてしまうほどの月日は経っていない。
イ 別れ別れになっても、心は離れていない。

ウ さびしいときには、いつでも会いに来ればよい。
エ お互いに忘れないでいれば、また会える日が来る。

2 ① 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 無益のことをなして時を移すを、愚かな人とも、僻事する人ともいふべし。国のため、君のため、やむことをえずしてなすべきこと多し。其余の暇、いくばくならず。思べし、人の身にやむことをえずして営む所、第一に食ひ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三には過ぎず、飢え、寒からず、雨風に侵されずして閑かに過ぐすを楽しむとす。

但、人皆病あり。病に侵されぬれば、その愁へ、忍びがたし。医療を忘るべからず。薬を加へて、四のこと、求めえざるを貧しとす。此四欠けざるを富めりとす。此四の他を求営むを奢りとす。四のこと儉約ならば、誰人か足らずとせん。

(吉田兼好『徒然草』より第二百二十三段)

- *1 無益のこと＝無駄なこと。
- *2 僻事する人＝間違ったことをする人。
- *3 いくばくならず＝どれほどもない。
- *4 人の身に＝人間の身として生きていくために。
- *5 営む所＝得ようと努めることは。
- *6 忍びがたし＝たえがたい。
- *7 儉約ならば＝つつましかかな有り様ながら足りているならば。

問一 ―― 線①「無益のこと」と対照的な内容の言葉を古文中から十五字で書き抜きなさい。

問二 ―― 線②「この三」の内容を意味する三字熟語を書きなさい。

--	--	--

問三 ―― 線③「四のこと」を、それぞれ古文中から書き抜きなさい。

問四 ―― 線④「誰人か足らずとせん」の意味として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 誰かが足りないところをやるだろう。
イ 誰にも足りないとは言えない。
ウ 誰が足りないとするだろうか。
エ 誰かが足りないようにしたのである。

--	--

問五 この文章で述べられている筆者の考えと合うものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間としてできるだけ多くのことを得ようと努力したいものだ。
イ 四つのことしか手に入らない生活は、貧しいと言ってよい。
ウ 病に侵されないようにすることで儉約ができる。
エ 生きていく上で、四つのことが必要でかつ十分である。

--	--

練習問題

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

うらやましげなる物 経などならふとて、いみじうたどたどしく、わ
すれがちに、返返おなじ所をよむに、法師はことほり、男も女も、くる
くると、やすらかによみたるこそ、あれがやうにいつの世にあらん、と
おぼゆれ。心ちなどわづらひてふしたるに、笑うち笑ひものなどいひ、
思事なげにてあゆみありく人みるこそ、いみじう 。
稲荷に思おこしてまうでたるに、中の御社のほどの、わりなうくるし
きを念じのぼるに、いささかくるしげもなく、おくれて来と見るものど
もの、ただいき先にたちてまうづる、いとめでたし。二月の午の日の
暁に、いそぎしかど、坂のなからばかりあゆみしかば、巳の時ばかりに
なりにけり。やうやうあつくさへなりて、まことにわびしくて、など、
⑤ ④ ③ ② ①
かからでよき日もあらんものを、なににまうでつらむ、とまで涙もお
ちてやすみ困ずるに、四十よばかりなる女の、壺装束などにはあらで、
⑥ ⑦
ただひきはこえたるが、「まろは七度まうでし侍ぞ。三度はまうでぬ。い
ま四度は事にもあらず。まだ未に下向しぬべし」と、道にあひたる人に
うちいひて、くだりいきしこそ、ただなる所には目にもとまるまじきに、
⑧ ⑨
これが身にただいまならばや、とおほえしか。
女児も男児も法師も、よき子ども持たる人、いみじううらやまし。髪
いとながく、うるはしく、下りばなどめでたき人。又、やむことなき人
の、よろづの人にかしこまれ、かしづかれ給、見るもいとうらやまし。
手よくかき、歌よくよみて、もののをりごとにも、まづとり出でらるる、
うらやまし。

* 1 返返 くり返し くり返し。

(清少納言『枕草子』より第百五十一段)

* 2 法師はことほり 法師は当然のこととして。

* 3 くるくると 舌のよく回る様子。 * 4 やすらかに 簡単に。

* 5 あれがやうにいつの世にあらん あの人のように、いつの世にな
つたらなれるのか。

* 6 笑うち笑ひ 快さそうに笑い。

* 7 稲荷 京都伏見にある稲荷大社。

* 8 中の御社 上中下の三つあるうちの、中の社。山の中にあつた。

* 9 わりなうくるしきを 耐えがたく苦しいのを。

* 10 念じのぼるに 我慢して登るのに。

* 11 ただいきに 行き目もふらず、どんどん。

* 12 なからばかり 半分ほど。 * 13 巳の時 午前十時ころ。

* 14 など どうして。

* 15 やすみ困ずるに 休息し疲れ切っていると。

* 16 壺装束などにはあらで、ただひきはこえたるが 外出姿でなく、
ただ裾をからげただけなのが。

* 17 未に下向しぬべし 未の刻(午後二時)に帰途につけるでしょう。

* 18 ただなる所には 普通の場合だと。

* 19 下りば 垂れ下がった額髪。

* 20 もののをりごとにも 何か事があると、その都度。

問一 線 A 「いみじう」、B 「わづらひて」、C 「まうでたるに」の

読み方を現代かなづかいのひらがなで書きなさい。

A

B

C

もの

③ えた

③

ウ ア

④ ㄱ

ア ④

ウ ア

⑧ ㄱ

ア ⑧

ウ ア

| ウ

古

古

1

ア て
最

イ ア

ウ イ

エ ウ

六 工

とは

ア 適当

アリ

イ 利

イ
四

ウ 四

ウ
な

工 夫

は 工

は

ち
に

ち
に
の
と

の
と